

知られざる民族ナバタイ人

徳永里砂

ナバタイ人と香料貿易

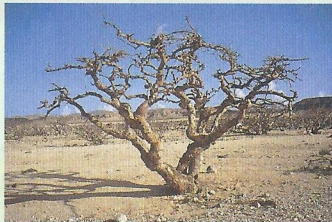
ペトラを拠点に活躍したナバタイ人は、アラビア語を話すアラブの一族である。ナバタイ人が初めて歴史に登場するのは、前1世紀のシチリア出身の歴史家、ディオドルス・シクルスの『歴史叢書』の中の、前312年についての記述である。

それによると、ナバタイ人は1万人程度の集団で、敵の収奪の的となる水源もない荒野で野外生活を営み、農耕、果樹栽培、さらにはブドウ酒も、家を建てることも、法により厳しく禁じていた。ラクダやヒツジを飼育している点では、周辺の他のアラブ諸部族と変わりはないが、南アラビア(現在のイエメン、オマーンの一部)と地中海世界を結ぶ隊商貿易(P.103地図参照)と死海地方での瀝青(*1)の採集によって、莫大な富を築き上げていたという。この時、ナバタイ人は、アレクサンドロス大王(*2)の後継者、アンティゴノスによって侵襲されるが、ペトラにこもってその攻撃に驚異的に持ちこたえた。

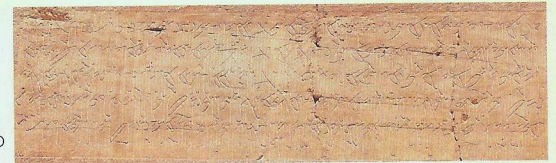
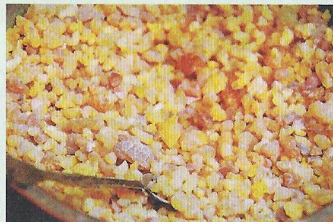
隊商交易とは、それぞれ50キロ程の積荷を載せた何千頭ものラクダと沢山の人々から成る隊商が都市から都市へと移動する、大規模なビジネスである。このような交易は、前2000年紀末に、ラクダが運搬動物として家畜化されるようになってから始まったもので、前1000年紀のアラビアはそれによりおおいに

栄えた。運ばれていたものは、おもに南アラビア産の乳香と没薬をはじめとする香料、東アフリカ、インド洋世界からの貴金属、象牙、香料、香辛料などの奢侈品であった。乳香(*3)と没薬(*4)は樹脂香料で、特に乳香は、古代中近東・地中海世界各地の宗教儀式で焚かれ、神に捧げられていた。また、両者共に薬品としても使われ、なかでも没薬は、瀝青と共にエジプトでのミイラ造りに欠かせなかった。ちなみに、イエスの生誕に際して東方三博士(*5)が持ち寄った贈物は、金の他、乳香と没薬である。それらは実に、神聖かつ高価な香料であった。

周辺の大国がアレクサンドロス大王の死後の後継者争いに専心する間、ナバタイ人は現在の南ヨルダンを拠点に、着々と勢力を伸ばした。彼らは、セレウコス朝(*6)による従属の試みも巧みに退け、プトレマイオス朝(*7)とも良好な関係を築き、必要以上に戦争に巻き込まれることを避けた。ナバタイはその香料貿易に有利な立地と富のため、常に周辺国の侵略にさらされたが、ナバタイ王国自体は平和を好む商業国家に徹し、その歴史をとおりして侵略戦争による勢力拡大を試みることはなかった。時には大枚をはたいて平和を買うことすらあった。



左/乳香の木。オマーンなどの南アラビアでよく見られる
右/香炉で焚くとよい香りのする乳香



トゥルクマニヤの墓のナバタイ語の碑文

ナバタイの王たち

前2世紀になると、ナバタイ人のなかに王が現れ、また独自のナバタイ文字(P.79コラム「アラビア文字の祖、ナバタイ文字」参照)で碑文を刻むようになる。彼らは初期の段階から、全ての公文書に当時のこの地域の国際公用語であるアラム語(*8)を採用した。遠隔地交易に従事する彼らは、数カ国語を使いこなしていたと考えられ、碑文にはギリシア語からの借用語も見られる。

前1世紀頃、ナバタイ人は定住し、石造りの家に住むようになる。ペトラでは、アイン・ムーサの泉水を使った灌漑農耕が行われた。地理学者ストラボン(前64 / 63年~後24年頃)は次のように記している。「(ペトラの岩壁の)内側には泉が湧いて尽きることもなく、

これを家々へ給水し果樹園へも送る。」「大半の土地はオリーブ以外実り豊かで、住民は(オリーブ油の代わりに)ゴマ油を使う。」ナバタイ文化のひとつの特徴ともいえる独特の薄手の土器には、彼らの農耕生活を示すシンプルな植物文が描かれるようになる(P.85コラム「ナバタイ土器」参照)。

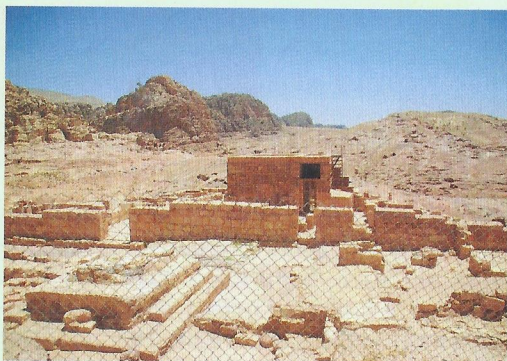
ナバタイの王たちに関するストラボンによる記述は実に興味深い。

「王は非常に庶民的で、自分の用を自分で片付けるどころか、時には進んでほかの人の世話まで焼くほどである。王が、民衆のなかでその職務履行について報告し審査を受けることもしばしばだし、時には私生活面のことまで審問を受ける。」





左/オベリスキの墓の前にあるアラム語の碑文(ペトラ)
右/1世紀頃のナバタイ人の住居跡、アツザントウール(ペトラ)



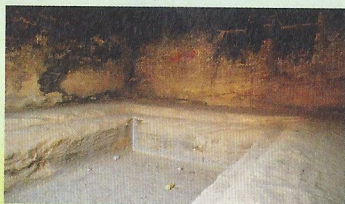
「…奴隷がほとんどいないから大部分のことについては同族の人々が世話をするか互いに世話をし合うかそれとも自分のことは自分でするし、この習慣は王たちにまでも行き渡っているほどである。」

「人々は內衣を付けず腰巻を巻きサンダルをつっかけて表へ出てくる。王たちも同じ出で立ちだがこれらは紫紺色で装っている。」すなわち、ナバタイにおける王とは、人々の代表者でしかなく、絶対的な権限を与えられることもなかった。恐らく、その性質はアラブの族長のそれに近かったのであろう。

また、王は頻繁に饗宴を開いた。ストラボンは次のように記している。

「13人ずつが一組になって会食し、その宴席ごとに歌い女がふたりつく。王は大勢の人を集めての宴席を数多く持つが、出席者は黄金造りの酒盃を次々に取り換えながら飲み、しかも11杯を超えることはない。」

※以上、ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』II、飯尾都人訳、龍溪書舎、1994年より一部改変。



パーブ・アッシークにあるトリクリニウム(ペトラ)

岩山や神殿に造られた、コの字型のベンチのあるトリクリニウムと呼ばれる部屋(左下写真参照)は、このような饗宴に使われたものである。饗宴は、宗教行事でもあった。

ローマ軍からアラビアを救った名相シュライオス

香料、香辛料、アフリカのさまざまな奢侈品の交易で巨万の富を築いていた南アラビアは、ギリシア・ローマでは「幸福のアラビア」と呼ばれる伝説の土地であった。前31年、アクティウムの海戦(*9)でクレオパトラ(*10)に与したアントニウス(*11)に勝利して地中海の覇権を握り、帝政ローマを開いたオクタヴス帝(*12)は、このアラビアを何とか勢力下に収めたいと考えた。そこで、彼はエジプト総督アエリウス・ガルスにアラビア遠征を命じる。当時、ローマはナバタイ人と友好関係にあり、ナバタイ側はこの遠征の「道案内に立ち一切の費用を負担し戦闘に協力する」ことを約束した。地理学者ストラボンは、彼のパトロンであり友人でもあったガルスから、アラビア遠征について直接話を聞き、多くを書き留めている。

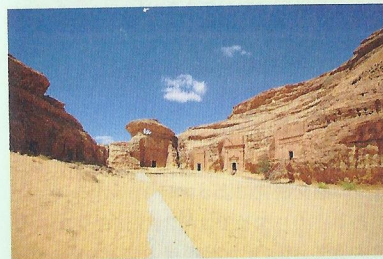
当時のナバタイ王、オボダス3世は軍事・政治に無関心で、宰相シュライオス(P.105右上写真参照)が実権を握っていた。宰相はナバタイ王国では「王の兄弟」と呼ばれる地位である。シュライオスは外交手腕に長け、自ら外交使節として動き、ローマ、ユダヤのへ

ロデ大王との友好関係を築いている。このシュライオスがローマ軍の案内人となり、1000人のナバタイのラクダ騎兵を率いて遠征に参加した。

ローマ軍はエジプトから、数多の苦勞を乗り越えながら、歩兵約1万人を軍船と輸送船でナバタイ領内の交易港レウケ・コーメーに運んだ。そこからローマ軍はシュライオスの案内に従って、内陸ルートで南アラビアに向かうのだが、途中、戦闘ではなく病氣、疲労などのために多くの兵を失い、遠征は大失敗に終わった。ストラボンの記述では、シュライオスは「裏切り者」で、悪意をもって回り道をしたり、悪路に導いたりしたのだという。

しかし、今日では、ストラボンが記録した行程は、全て交易路として既に確立されているルートであったことがわかっている。当然ながら、ストラボンの記述はガルスびいきに徹している。実際のところ、シュライオスは、裏切ったわけではないが、ローマ兵たちが砂漠の行程に適応できないことくらいは、あらかじめ見抜いていたのであろう。彼はローマ軍をうまく利用して、ナバタイの商業がさらに潤うよう巧みに取り計らったのである。

とはいえ、シュライオスが相当の野心家であったことは事実で、オボダス3世の死後、自分自身が王位に就くことを狙っていた。シュライオスは、前9年の王の死後、ほんの短い期間ナバタイの統治者として君臨するものの、結局、別の男がアレタス4世として即位した。オボダス毒殺の疑いで囚われたシュライオスは、前6年、ローマにて処刑された。



かつてヘグラと呼ばれた、ナバタイ人の南の拠点マダイン・サーレハ(サウジアラビア)



宰相シュライオスの肖像が描かれたコイン

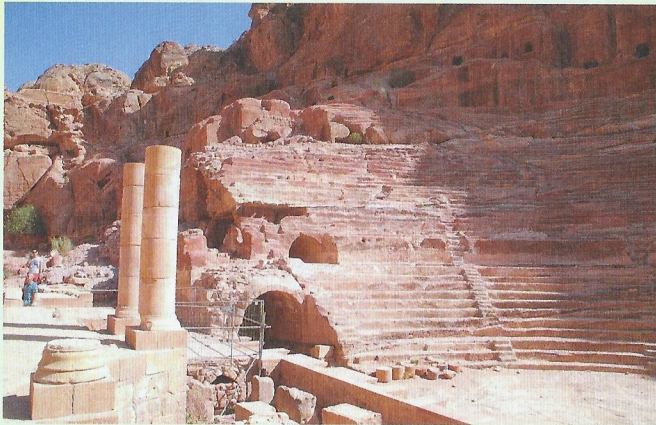
ナバタイ最盛期の王、アレタス4世

自らを「民衆を愛する者」と呼んだアレタス4世(下写真参照)は、その後、およそ45年間にわたって王位に就き、ナバタイ王国は彼の時代に最も繁栄した。王国の版図は、北は南シリア(ダマスカスまで)、南はヘグラ(現在のサウジアラビアのマダイン・サーレハ)まで拡大した。エル・ハズネヤカスル・アル・ビントといったペトラの最も荘厳な岩窟墓も彼の時代に造られたとされる。次の王、マリクス2世の時代もその繁栄を引き継いだ。



左/表:アレタス4世の肖像と銘文「ナバタイ人の王アレタス」右/裏:王妃フルドゥウの肖像と銘文「ナバタイ人の女王フルドゥウ」

マリクスの後継者、ラベル(ラッパエル)2世の時代もペトラの繁栄は続いていたが、政治の中心は南シリアのボスラに移された。その理由は明らかではないが、この頃のアラビア半島からの内陸交易ルートがペトラを通過せず、より内陸の道をとって、ボスラにいたるようになっていたことに関係しているのかもしれない。アフロディーテー(*13)と同一視された女神ウッザーの信仰がペトラで勢いを増していたのに対し、ラベルはボスラで元来のナバタイの主神であるドゥシャラーの信仰に力を入れた。

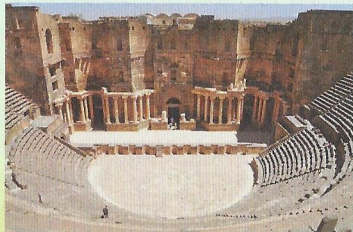


ローマ時代に大改装された円形劇場（ペトラ）

ローマによるナバタイ併合

ラベル2世は、ナバタイ王国最後の王となった。106年、ナバタイ王国はローマに併合され、その「アラビア属州」となる。紅海とシリアを結ぶ道路が建設され、アラム語に代わって、ギリシア語が公用語となった。ペトラはローマ支配下においてもしばらくは繁栄し続けたが、徐々に衰退し始める。すでに、主要な交易路が陸路から海路に変わり、南アラビアやインド洋からの商品が、ナバタイ領内を通過せずに地中海世界へと運ばれるようになったことや、シルクロード交易で栄えるシリアのパルミラ王国の台頭、政治の中心がボスラに移されたことなどが、衰退の主な原因と考えられる。さらに、363年には大地震がペトラを襲い、町の半分を破壊するという大規模な被害を与えた。

ペトラでは、4世紀になると教会が建設さ



ナバタイ王国最後の首都となったボスラ

れ、379年にキリスト教がローマ帝国にて国教化されると、キリスト教化が進められた。しかし、ペトラにはナバタイの神々の神殿や神官たちがなお存在し、土着の住民は彼らの信仰をなかなか捨てようとはせず、キリスト教化には時間がかかった。451年のカルケドン公会議(*14)でエルサレムに総主教座が置かれるとともに、ペトラは主教座が置かれ、キリスト教世界でも重要な地位を占めるようになった。しかし、それでもなおナバタイ文化は完全には廃れなかった。1993年、ペトラの教会遺跡から発見された6世紀中頃のパピルス文書には、ナバタイの王や神の名に因んだ人名が見られ、研究者たちを驚かせた。ビザンツ時代においても、ペトラの人々は、キリスト教、アラブ、ヘレニズム、ローマの文化に加え、かつて栄華を誇ったナバタイの伝統を引き継いでいたのである。

高い社会的地位を享受していた ナバタイの女性たち

さて、これまでに述べてきた、ナバタイの歴代の王たちの名前と統治年代は、おもにコインの銘文研究によって明らかにされたものである。ナバタイでは前2世紀末からローマによる併合後の3世紀前半まで、独自のコインが鑄造されていたが、古代中近東でも珍し

いのは、コインの中に、王に並んで、あるいは裏面に王母、王妃の像が描かれ、その銘文に「女王」と記されているものがあることである(P.105右下写真参照)。ナバタイでは、王妃は夫王と共に尊重され、さらに、王母は若年の息子が王として即位した場合には、共同統治者として君臨した。

また、碑文・文書研究からは、ナバタイの女性たちが男性と同じように、相続権、所有権を持っていたことがわかっている。女性た

ちのなかには、農園や墓を所有する者もあったし、商業取引も行っていた。女性は法的に完全に独立した存在で、夫婦間の金銭貸借に際しても、書面をもって契約が結ばれることがあった。

このように、ナバタイ王国では女性の経済的・社会的地位が高かったことがうかがえるが、ローマによる併合後はその影響を受け、女性の権利は縮小したといわれる。

注釈

*1 瀝青(沥青)

炭化水素からなる化合物で、防水、防腐、接着剤として利用される。天然アスファルト、コルタルなどの種類がある。古代エジプトでミイラの防腐剤として使われた瀝青は、死海で採集されたものだった。

*2 アレクサンドロス大王

前356～前323年。アルゲアデス朝マケドニアの王。哲学者アリストテレスに学問を学んだあと、22歳の若さでマケドニア王を継承。ギリシア、エジプト、ペルシャ、インドなどを次々に制圧し覇権を拡大したが、前323年に病気で急逝。

*3 乳香

別名フランキンセンス。アラビア半島南部、東アフリカなどに分布する、ムクロジ目カンラン科の樹木から分泌される樹脂。おもに薫香として使用される。その独特の香りと希少さから、神聖なものと考えられ、古代エジプトなどでは副葬品として埋葬されたという。

*4 没薬

フウロソウ目カンラン科コンミフォラ属の樹木から出る樹脂を固めたもの。別名ミルラとも呼ばれ乳香と同じく薫香として使用されてきたが、その殺菌作用から防腐剤、鎮静剤としての効能も知られている。

*5 東方三博士

新約聖書のマタイによる福音書に出てくる、キリストが生まれたときに東方からやってきて、キリストを拝んだといわれている人物。福音書には人数は言及されていないが、3つの贈り物からのちに3人であると考えられた。

*6 セレウコス朝

アレクサンドロス大王の後継者(ディアドコイ)のひとり、セレウコスが起こした王朝。首都はアンティオキア。大王の死後、ディアドコイ戦争にて国は3国に分かれ、セレウコスはそのひとつセレウコス朝シリアをメソポタミア地方に建国した。紀元前1世紀にローマの支配下に入る。

*7 プトレマイオス朝

アレクサンドロス大王の後継者(ディアドコイ)のひとり、プトレマイオスがエジプトに興したマケドニア系王朝。首都はアレクサンドリア。ヘレニズム文化の中心として栄えた。紀

元前1世紀にローマにより征服された。

*8 アラム語

イエスが布教活動に用いていたセム系の言語。もとはバビロニア王国を建国したアムル人が使用していた言語で、アムル人の国家がなくなったあとも7世紀まで西アジア一帯の公用語として使用された。

*9 アクティウムの海戦

前31年、イオニア海のアクティウムで、オクタヴィアヌス(後のアウグストゥス)とアントニウス・プトレマイオス朝エジプト連合の間で行われた海戦。オクタヴィアヌスが勝利し、初代ローマ皇帝としての道を歩み始めた。

*10 クレオパトラ

プトレマイオス朝エジプト最後のファラオ、クレオパトラ7世。プトレマイオス13世とエジプトを共同統治していたが、後にクレオパトラはローマのカエサルと結託し、エジプトの事実上の単独統治に成功。カエサルの死後は同じくローマのアントニウスと組み、上記アクティウムの海戦へといたり、敗戦して自殺してしま

*11 アントニウス

共和政ローマの政治家・軍人。第2回三頭政治のひとりとして権力を握る。上記アクティウムの海戦でオクタヴィアヌスに敗れ、その後自殺。

*12 アウグストゥス

養父ユリウス・カエサルの遺志を継いで内乱を勝ち抜き、上記アントニウスとのアクティウムでの海戦で勝利。ローマ帝国初代皇帝となる。地中海地域を制覇し、「ローマの平和」パックス・ローマーナを実現した。

*13 アフロディーテー

ギリシア神話における美と愛欲の女神。ローマではヴィーナス(ウェヌス)。肉欲の女神でもあり、優雅でセクシー。有名な「ミロのヴィーナス」はアフロディーテーがモデル。

*14 カルケドン公会議

現在のトルコ、イスタンブールのカルケドン(現在のカドゥキョイ)で行われたキリスト教の公会議。